第 4 回　インターンシップ報告書

2011 年 4 月 10 日

東京外国語大学大学院
総合国際学研究科 国際協力専攻
国際協力専修コース　博士前期課程 1 年
小川　友理恵

【基本情報】

派遣機関：経済協力開発機構(Organization for Economic Co-operation and Development: OECD）パリ本部

都　　市： パリ、フランス

勤務部署：Public Affairs and Communication Directorate (PAC), Public Affairs Division

派遣期間：2011 年 1 月 10 日～7 月 10 日（予定）

【主な業務内容】

5 月 24 日・25 日にかけて開催される、OECD50 周年フォーラムの企画準備チームに所属。参加者登録(Registration)の担当としての招待客に関連した業務に加え、フォーラムのホームページ作成や外部からの OECD 訪問プログラムの補助など。

【途経過報告】

1 月から始まった半年間のインターン生活も、いよいよ折り返し地点になった。フォーラムの本番である 5 月 24 日・25 日までも 2 ヶ月を切り、フォーラムチーム全体の忙しさも日に日に増している。現在、主に携わっている業務の状況は以下の通りである。

・参加者登録(Registration)手続き

参加者登録は地道ではあるが、一方でフォーラム当日のセキュリティやフォーラム自体の内容も左右する、責任のある作業でもある。既に数千人に対してオンライン登録ができる招待状を送付しており、また電話や E メールでのオンライン登録の際の不具合、ビザなどに関する問い合わせの応対にも忙しい。そのため、3 月後半からは私だけでなくもう一人のインターンとペアを組んで招待状送付、ビザ申請の補助、問い合わせの応対などを行っている。大変ではあるが、ガーナやブラジルなど日本にいては一生電話することもないであろう国からの問い合わせに応対し、感謝されると、やりがいも感じられる仕事である。

・フォーラム全体の準備

週 1 回それぞれあるフォーラムチームと部署全体のミーティングで、お互いの仕事の進行状況の共有や改善・反省点の確認が行われている。フォーラム当日のプログラムやスピ

ーカーの決定、スポンサーとの提携、配布物、会場の装飾や警備の配置など、あらゆるものが同時進行で進められているので、足並みを揃えることは大変重要である。先日はPACのトップにあたるディレクターと、広報、出版・メディアなどPAC全体を交えて、フォーラムをよりよくするためのミーティングも行われた。

・外部の訪問プログラム/セミナー（Visit）

中央大学、そして早稲田大学の学生の方々のOECD訪問プログラム/セミナーに、今回は補助ではなくOECDの活動内容について発表する側として参加した。早稲田大学からの訪問は早稲田のOBでもある邦人職員の方のコーディネートにより、現在フランスで留学中の学生の方々が集まり、OECD職員とOECD日本政府代表部の方の発表も含めた、充実した内容となった。学生のみなさんからの日本とOECDの関係や国際機関で働くことなどについての積極的な質問は、まだ学生である私にとっても大変勉強になった。

【1月に挙げた6か月後に目標とする成果を振り返って】

初心にかえって、インターン開始当初に挙げた目標を振り返りたいと思う。

・OECD50周年フォーラムのような大規模な国際会議の運営に直接係わることにより、OECDの活動内容への理解を深め、同時に国際会議における課題や国際機関の中身を知る。

→OECDの活動内容についての理解は、既に述べた外部の訪問プログラム/セミナーの準備や実際の発表を通して得たものが大きい。もちろん、フォーラムの当日のプログラムやOECDの50周年を記念する出版物の手伝いをする上でもOECDの現在に至るまでの活動内容に触れる機会は多いため、とても勉強になった。国際会議における課題という点については、インターン開始前にイメージしていたフォーラムと、実際の内容がやや異なることが分かってきたので、見直す必要がある。しかし、フォーラムの準備だけに関して言えばしがないインターンとしても挙げたくなる改善点は見受けられる。この点に関しては5月のフォーラムが実際に開催された後に、まとめたい。

・職員やその他の機関の関係者などとの人脈を広げながら、将来国際公務員になるために求められる能力や知識とは何かを理解する。

→今回のインターンを通しての出会いは、常に一期一会だと思って接するように心がけている。職員の方との昼食や午後のコーヒー、仕事の後のOECD職員やインターンの集まりには積極的に参加し、機会があるごとにOECDでの仕事内容やOECDに来た経緯などのお話を伺っている。あらゆる機関やNGOを渡り歩いてきた方もいれば、OECD一筋の方、政府から出向してきている方、などなど、OECDでの出会いを通して国際機関への道は一本ではないということを改めて認識し、自分の将来の方向性について考えさせられている。

・英語・フランス語力及び職場でのコミュニケーション能力を向上させる。

→英語の点では、参加者登録の仕事のおかげで電話やEメールの応対にも随分慣れ、てきぱきとこなせるようになった。一方フランス語は、電話の場合は万が一の誤解を避けるため相手が英語を使用可能か確認し、大丈夫であれば英語で対応をしている。フランス語のみの場合は努力して対応しつつも、手に負えなくなってしまったらネイティブのインターンに助けてもらっている。インターン仲間ではつい英語になってしまうため、日本語を勉強したいという職員の方と、週1～2回お茶をしながら日本語とフランス語の助け合いも行っているが、まだまだ努力が必要であると感じている。

・世界中のあらゆる分野の専門家やデータが集まっている利点を活かして、知識を深め、今後の研究内容に還元する。

→特にこの目標は遅れを感じているので、インターン後半において積極的に力をいれて行きたい。フォーラムが近づくにつれて研究活動を行える通常業務の合間そのものがあまり無くなってしまった部分が辛い所ではあるが、今後の自分の研究内容も含めしっかりと考えていきたい。

【その他】

3月11日の日本での震災を受け、フランスでも各地でチャリティコンサートやイベント、募金活動などが行われている。震災当日は、私も出勤直後にニュースで知ってショックを受けたが、幸い母から家族の無事を伝えるメールが届き、なんとかその日の業務を終えることができた。パリ本部のPACではただ一人の日本人であったため、当日は事務総長の被災者の方々へのメッセージの日本語訳を急遽頼まれた。他の局であるにも関わらず訳の最終確認を手伝って頂くなど、今回は邦人職員の方々との連携に大変助けられた。

その他、OECD内では有志の邦人職員の方々で集まり、各局で分担しあっての職員間での募金活動を行った。今まで話したこともない方からも「日本の家族や友人は大丈夫か」などと声をかけてくれたり、日本へのメッセージとともにチェックが届いたりと、OECD職員の方々のあたたかさを実感した。

その他4月3日に行われたチャリティーバザー（詳細はhttp://www.pray-for-japan.org/）での展示をOECD邦人職員数名で行い、微力ながら私もボランティアとして展示資料のフランス語訳チェックや展示作業などを手伝った。バザー当日は会場に多くの人がかけつけ、外には2時間待ちの列ができるほどのイベントとなった。

日本から遠く離れていると何もできずに歯がゆい気持ちにもなるが、日本の1日でも早い復興を願って、今後も自分のできるかぎりのことを続けていきたいと思う。

↑理事会が行われる Château 内の加盟国国旗。

↑バザーに出品されたパティスリー・
サダハル・アオキの特別ガトー。

↑チャリティバザー会場の様子。
右手奥が OECD 職員による展示の一部。

↑日本へのメッセージ。